

無差別智の世界

杉田善孝（光明会本部主管）

大自然（本文三〇頁）

ここにひとりの人が大空の下、大地に立っています。かれは静かに呼吸し、心臓は脈打っています。そのような物質現象をもった個人格としての生きたかれには精神があります。その精神は本来一つですが、属性として智力と意志とをもっています。また、かれの智慧は観念と理性と認識と感覚の四作用に分類できます。かれはこのような精神、すなわち人格をもった一個の生命体であるわけです。

しかし、一個の生命は生命あるものでなくては産むことができないのではないか。かれには両親がある、その両親にはまたそれぞれの両親があるというふうに、先祖へ先祖へとさかのぼっていくと、けつきよく進化の歷程をさかのぼって、ついにはアメーバ、モネラといった単細胞当時にまで達します。さらに、これらの単細胞はなにもが産んだかという、帰するところ太陽を父とし、地球を母として、けつきよくは大宇宙が産んだといわれないわけにはいきません。すると大宇宙が生命を産み出したこととなり、それなら大宇宙はやはり一大生命体ではな

かろうか、ということになってきます。

かれという身体と精神をもった人間がこのようにして産まれてきたのは、生物の進化というたいへんな過程を経てきたわけですが、この現われるということは本源があればこそ現われるので、ないものは現われません。その本源はなんでしょうか。今、それを大宇宙に求めるのはなぜかという、かれは直接には両親が産んだが、ほんもとにさかのほれば大宇宙が産んでいるからです。ですから大宇宙は、本源としての一大觀念と、一大理性と、一切認識と一切感覚の本源という一大智慧と、一大意志とがなくてはならない。つまり一大人格的存在でなくてはならないはずです。

つぎに身体と精神の関係ですが、身体は被使用者で、使用者は精神、頭の中にある自我です。自我が運動しているとき、身体全体はそれに従って動く、身体全体は自我によって支配され統御されています。すなわち、主宰の意味で自我がかれ全体の中心だといえます。そして、感じとして自我はその身体全体を自己内容としています。

ちょうどそのように、わたしたちの本源としての大宇宙にも自我に相当する中心があつて、光明主義ではこれを絶対中心、報身ほうしんといっています。この中心は大宇宙全体を支配し、大宇宙いっさいをその自己内容としています。その属性として、一大智慧と一大意志（能力）とがあつて、これを宗教的に光明と申します。岡先生の大自然とはこの大宇宙（全体と中心）のことであり、大は無限無数を包含する意味でもありますから、肉眼で見たただの天地万物はその上つ

つらで、それあらしめている一大智慧（先生の四智）と能力との無限の奥行きを含めたものです。従来の仏教は、大宇宙の全体、すなわち法身ほっしんを根本前提としてきましたが、光明主義は全体の中心——報身を根本前提とした教えであり、先生の思想も信念もこれに基盤をおいていられます。

大自然の叡智えいち（本文三一頁）これはつぎの四智をさしていられます。

大円鏡智だいえんきやうち（本文三二頁ほか）

無限の大宇宙つくして心ならざるはなく、それは時空を超越しているから、その心の中には大宇宙いっさいの物質的、精神的両面が了々と映っています。

たとえば拍手したとします。わたしどものように音波が聴官に伝わって注意活動が向けられて聞く間接認識ではなく、かかるなんらの心理学的媒介物を必要とせず、鏡にたとえると、まるで物が鏡に映るようにわかる認識の仕方（直接認識）によって、了々と認識する。しかも、この音のするところがただちに鏡で、そこで了々と直観する。たいたいところに聞き手の心の本体としての鏡の体があるからです。また、日常経験する世界も鏡智以外のものではなく、日々経験する森羅万象は鏡智の相対的分現で、鏡智はそれ自身全体であり絶対です。

平等性智（本文三一頁ほか）

ウィリアム・ジェームズ（アメリカの心理学者・哲学者）は、「心とはいかなるものかとせんじつめると、けっきょく「The knowing（知る、わかる）」というほかない」といつています。心は知る、見る、痛みを感じるなど「覚り」でないものはない。それは部分には分けられない全一のものです。たとえば、ここでわたしの顔や声に注意を向けてくださるときは、まざまざとここにわたしの顔や声が見え聞こえている。そのとき、ただ色・形や声の五官の対象があるのみでなく、その色・形や声の覚りがある。すなわち認識の主体がある。しかし、わたしどもは、「これはなんだ」といわれると、色・形だ、とじかにいえても、覚りとはいえない。それは差別だけに気づいて心の鏡の平等面に気づかずにいる状態です。

認識の働きが、覚りというところに働くようになったときは、五官の対象としての色・形というものはまったく消えてなくなります。覚りとは本来無一物、本来無東西、大宇宙つくして姿・形なにもない空です。時空を超越し、いっさいを認識する主体というところからいえば絶対主体として、ただ了々、はっきりはつきりめざめているというほかないものです。こういうのが覚りの当体、大我です。これは、永遠不滅、大宇宙いっばいの我であります。

カントは意識一般といい、ヘーゲルは純粹覚知といった、内容ぬきの形式。だから平等性智は心の鏡の体だけ。鏡とその中に映る影といっしょに名づけると大円鏡智となります。

わたしどもは宇宙の一分子だからその一部分をもらっています。この拍手の音聞こえるでし

よう。けれど頭の中に聞こえている事実はないのです。この音のするところで聞こえている、
覚わかつていてるでしょう。それは聞く主としてのあなたがそこに在るからです。音波・神経系統・
注意活動という三つの原因が結合したとき、本来からある覚わかりがそこに働いて拍手の音を聞く
ことができます。音という一面は原因あってきてはなくなる無常なものです。けれど、他の
一面は聞く主としてのいつも変わらぬあり通しの我、大我です。そうであるのに、ただの音だ
と思い、聞く主は変わりに変わるこの体だと思つてゐる。それは覚わからるるものであるのに覚わか
主と思つてゐる。まさに業ごうと煩惱ぼんのうのしからしむるところです。

また、見る・聞く・働く、みなともに自分でわかる。わかるのでなければ心理学も倫理学も
ありえません。しかし、それは原因あつて結果する現象としての心です。そしてわたしどもの
認識の働きは、できてはなくなり、なくなつてはできる現象の方面にとらわれている。そのと
らわれている現象のほうから、覚わかりを見たばあいを、金剛こんどう經きやうに「心不可得しんふかたく」（本文四六頁）とい
つてゐる。この自分の經驗の本質真相がなかなかわからないということです。だから、「心不
可得」とは、肉の心によつて經驗することはできるけれども、大宇宙全一の本来心による直観
でないから、自分の經驗の本質真相は不明である、という意味でいつてゐるわけですね。なお
性智についてはもう一面からいわないといけないのですが、今は略します。

妙觀察智（本文八九頁ほか）

大宇宙は分かつべからざる唯一の我。その大我の心をもつて、たとえば針の先を見ると大我全体が働きかかる。その大我の中にいっさいが包含されているから、針の先に大宇宙を見ます。いっさいが一にはいり、一がいっさいにはいる。光明主義の開祖弁栄聖者は、「目の中へも宇宙の星がはいる」とたとえられ、「いっさいはくつついている」と教えられました。

わたしども日常経験の世界もその一部分が現われています。何億万という遺伝質が顕微鏡的単細胞の中にことごとく伝わる遺伝現象や、雌しべと雄しべが合体して結実するように、べつべつものが合して分かつべからざる一生命体となることや、また種々の化学変化などは察智のしからしめるところです。

成所作智（本文八九頁ほか）

わたしどもに叡智の目を開かせて、絶対界の感覚差別の現象を見させる力です。日常経験の世界にも一部分現われていますが、たとえば感覚器官に刺激あらしめ、注意あらしめて感覚作用あらしめるごときといったものです。

このように大宇宙は、なに一つとして四智の顕現分現でないものはないというわけです。し

たがって四智は、わたしどもの日常経験に關係はあるが、経験から生ずるものでなく経験に先んじて存在するものであつて、経験が起こるときかならずそれを伴わなければ経験が成立しないもの、すなわち先験的のものですから、先験觀念（本文二九頁）と先生はいわれたのでしよう。仏教では三昧（本文二〇八頁）という統一的に働く精神作用を重んじます。それは認識の主と客の別をなくらせて一つにする性質があるので、仏道修行の根本とします。光明主義は三昧心をもつて直接純粹に四智全般といつきよに合一することを目的としますが、身心を通して、その程度程度において四智が発現したところの直観（直接認識）を先生は純粹直観（本文八八頁ほか）といわれています。

無差別智ということですが、四智のおのおのを理性平等形式の面と感性差別内容の面に分けて、理性平等形式の面に関するものをふつう無差別智というのですが、先生は形式内容ともにあわせた四智全体を無差別智といつていられます。なお、仏教では智慧は大慈悲の発露です。

無生法忍（本文三二頁）

仏教でいう法身には三面あるといいますが、三昧体験の事実からそれとの合一の順にいうと、性（いつも変わらぬあり通しの永遠の生命）、如来藏性（大宇宙いっさいの差別の象の本体）、法身の理法（平等の理法）であり、禪宗でははじめの性と合一をもつて無生忍とい

ますが、弁栄聖者は三面全体、とくに法身の理法と合一した境界、如来の平等形式の面と合一したところを無生忍といわれました。

如来はその本体、法身の全体、平等形式の面だけが、とわに、おのずと存するのではなく、その中心、報身もまた同様です。したがって四大智慧の相も大靈力も、絶対同時に、もとより完全円満に備わっています。その事実を明瞭に認識したところを無生法忍といっています。

如来の差別内容の面と合一したところで、平等形式の面の真理認識はいまだ低く、それよりさらに進んで、わたしども衆生のいっさいの活動をも含む絶対・絶対両界の無限の変化、無数の差別の現象の一つ一つの面において絶対最高の真理を了々と認識した境界です。無生忍では認識できなかつた絶対・絶対の現象の差別の理法、その差別の理法と平等法身の理法とが総合統一調和している甚深微妙の状態を直観できます。「絶対・絶対両界の根本仏としての報身のいっさいの理法と合一した境界である」と光明主義二祖戒浄上人はいわれました。

ゆえにこの悟りを得ると、たとえば代数の一や幾何学の点などその実質内容を正しく直観できます。数学では一や点はすでにわかつたものとしてとり扱うが、その一や点はなんだろう。

わたしどもにはわかりません。How (いかにして) は理性によってわかるが、Why (なぜ) はわからない。ゲーテのことを借りれば、*Offentlich geheimnis* (公開せる秘密) です。それがはつきりと認識されます。またキリスト教の原罪説、従来の仏教起信論の忽然念起無明説(忽然として差別の念が起動するを無明となし、さらに由来するところなければ忽然という)

など、「その発動するところを発見することあたわずして古来妄霧のうちにかれば形を隠せり」と聖者が批評されているとおりですが、聖者はここに宗教史上はじめて無明の由来を明らかにされました（また、その他物質現象の発現について等々）。無生法忍における真理認識は自然科学的真理認識の基礎認識・根本認識となり、この立場に立てば今後いかように自然科学が発達しても、光明主義によって科学を総合統一することができる。自然科学のみならずいつさいの学問・芸術などについても同様のことがいえるわけです。

「唯一」について

光明主義の開祖弁榮聖者の著わされた聖典『如来光明礼拝儀』の冒頭「至心に帰命す」即ち「猷身の祈禱」の一頁に「三身即一に在ます最いと尊きき唯一の如来よ」とあります。それについて岡先生は、「この『唯一の如来よ』の唯一の一は、それしか無いという一だ」と申されました。

また他日「数学は自然数の一とは何かを知らない。知らないだけでなく、此こ処こは到底手に負えないと知って全然不問に付している。数学が取り扱うのは次の問題からである。自然数と同じ性質を持った体系があると仮定しても矛盾が起るか起らないか。これから先である。そういう性質を持った体系があると仮定しても矛盾が起らない事の証明は将来、人の心で完全

にできるのか。それとも人の力ではできないのか、まったく不明である。もし証明できたとしても、『ある』と言えるのは法則だけであって、それも法則があると仮定しても矛盾しない』と言えるだけで、自然数の一そのものの本質真相にはまったく触れていない。これは肉の心だけを認めて宗教的方法（弁栄聖者が明了にされた慧眼法眼仏眼の認識能力）を認めない現代の数学・自然科学の立場だと思う」とも言っています。

要するに肉の心で自然数の一そのものが直観できるか。これが古来数学の根本的難問題の一つなのです。

結論を急ぐと「自然数の一、幾何学の一点も、絶対自身の報身の絶対無規定の体相用の一切の能動的顕現の故に、自然数の一、幾何学の一点は即ち絶対の報身の全体で、一切を含んだ絶対的人格的統一体である。この直観は光明主義の所謂超日月光位の無生法忍が得られないと自分のものとはならない」とは先師戒浄上人のお言葉であります。

光明主義

実に絶対中心、報身全体と合一した無生法忍の境界こそ、いっさいの宗教の中心真髄、いっさいの学問の核心であります。そしてこの無生法忍によって直観した事実に基づいて、帰納的に、大宇宙なる如来の事実、真理を説いたのが弁栄聖者の光明主義ですから、光明主義はこの

中心真髓、この核心をはっきりと説いた教義信仰であり、したがって、光明主義は、いつさいの宗教、いつさいの学問を包むと同時に、これらを超越した真実の宗教である、といえます。

今、わたしどもの敬愛する岡先生が、「科学者の目から見て矛盾を感じない宗教は光明主義一つしかありません。それは二十世紀の奇跡です」と賛嘆してやまれぬ理由は、ここにあるのです。